

### 震災大津波から10年。復興を考える。

平野 耕一郎（上下水道部門）

いわてを見る

あれから10年の月日が流れようとしている。多くの命が失われ、それでも被災者は復興を目指して営々と取り組んできた。国も前例のない大規模な支援を行ってきた。

これまで長大な防潮堤、大規模な市街地のかさ上げ、高台地区への移転、復興道路網の整備などなど数限りない対策を講じてきた。

しかし、復興事業が進むにつれて、厳しい現実が突き付けられてきている。復興をけん引する人の帰還が進まず、水産業も漁獲量の減少で経済も低迷している。ここにきて、様々な課題が見えてきた。最も大きいのは、復興事業に時間がかかりすぎて、せっかく整備された市街地は空き地が多く、本当の意味での復興が果たされていないこと。復興予算が終わる時がきたとき、被災自治体の財政がどうなるのか不安がよぎる。

10年前、震災復興計画策定にあたっては、いろいろな提案がなされたと記憶している。その中で選択された復興策は、津波のエネルギーに打ち勝つべく想定した波高を抑える長大な防潮堤と広大な市街地のかさ上げ造成を基本とした。しかし、青森から福島までの500キロ以上に及ぶ長い海岸線上の被災地はとてつもなく広大であった。復興事業は街づくり計画にはじまり、粗造成・道路整備・防潮堤・市街地造成・上下水道整備とひとつひとつ順を追って進めざるを得ない。しかし、我が国の持つヒト・モノ・カネには自ずと限界があり、どうしても時間はかかることはやむを得ないことである。

先日、NHK特集で洪水対策に関する番組があった。その中で、北海に注ぐエルベ川沿いのドイツの大都市ハンブルグの洪水対策を取り上げていた。ヨーロッパでも頻発する洪水への対応は都市の存続に

かかわる大きな課題となっていることは我が国と同様である。大規模な堤防と市街地の嵩上げ再整備で街を守るのか、それとも建物の低層階の浸水を前提に建物をリニューアルして洪水がきても生活に支障がでないようにするのか、どちらにするか。ハンブルグでは、後者を選択したのであった。例えるならば、「柳に風」方式を選んだということだろう。これは、今後の津波や大規模な洪水対策としての選択のひとつになるのではないだろうか。

今回の震災による津波の被害でも基礎のしっかりした鉄筋コンクリート造の建物には流されず残ったものもあった。ということは、津波が来ても流されることのない頑健な高層建築物による街の復興は十分可能であると考えられる。例えば、そうした頑丈な建築物の1～4階部分を駐車場など、水が洗っても人命に支障のない利用に供し、その上の階に行政・業務・サービス施設、さらにその上を住居に使えば、例え今回並みの津波が来ても「柳に風」となるのではないか。整備に要する時間もかなり短くなるはずで、被災者の帰還も増加するであろう。さらにメリットとして、道路・水道・下水道も幹線の整備だけで済むこと。もちろん長大な防潮堤を整備する必要もない。防潮堤がないということは、波打ち際まで障害物がなく近づけることで、人と海の関わりが自然本来の姿になり、美しい海岸線の景観を守り享受することにもなる。そして街づくりに係る復興財源も桁外れに安価に済むはずである。

今回の復興事業を、しっかりと検証し、英知を結集して近々発生が懸念される大規模地震と大津波に備えることが、東日本大震災により失われた多くの御霊に報いることになるのではないだろうか。